

A VII部

諸題

A VII部では諸題……構造形成に働く力、多義文の構造、諸種の構造……を扱う。

A17章では、構造に働いている「力」を明らかにする。

A18章では、多義文を生み出す構造を扱う。表層の文は一つでも、いくつかの意味があることがある。なぜそうなるのかを構造を用いて説明する。

A19章では、「ようだ・みたいだ」の構造を明らかにする。「カキは広島が本場だ」の文の構造を確認し、問題点を指摘する。「だけしか」の構造も探る。

A17章

構造形成力

話者は自己の中に判断という形のある構造を形成する。話者はその構造を描写してコトバという形で発話する。ここには構造形成の段階と構造描写の段階がある。（この2つの段階は常に時間的な先後関係にあるわけではなく、構造を形成しつつ描写を行い、描写を行いつつ構造を形成するという同時進行の関係にあることが多い。）

本章ではこの2つの段階のうちの、構造が形成される方の段階について考える。構造が形成される際にどのような力が働くのであるか、その力の種類を明らかにしたい。また、構造の一定の形式を要求する基の形成についても考える。基の形成には描写法も関わっている。

A17.1 構造を形成する力……構造形成6力

構造を構造として成立させるためにはどんな力が働いているのだろうか。

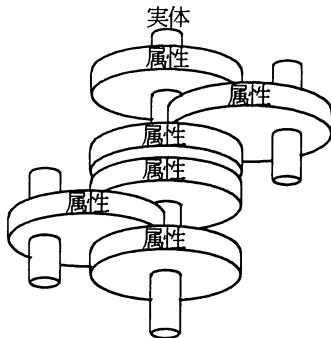
① 実体認定力（属性収集力）

まず、実体を実体として成立させる力がある。実体とは名詞のようなものであり、1つの表象（ふつうは名称を持つ）のもとに発話者（認識者）によって蓄積される属性の集合体である。この集合体は、その実体が主体として関わる属性および客体として関わる属性で構成されている。構造モデルでは円柱で表される（図A17-1, -2）。この円柱は発話時に瞬時に再構成される。

この集合体が成立するためには、発話者によって、ある属性がある表象のもとに存在することが承認されなければならない。そのためには発話者は「実体認定力」を持っていなければならぬ。これは実体形成のために諸属

性を縦に集合させる力である。「属性収集力」ということもできる。

発話者は経験とともに各実体の属性の数を増やしたり、減らし(忘れ)たりしていく。したがって、属性の増減に関して実体は閉じることではなく、実体が完成することはない。



図A17-1 実体は属性の集合体



図A17-2

なお、その実体にとって基本的で不可欠な属性が意義素を形成する。

② 属性認定力（主体収集力）

次に、属性を属性として成立させる力がある。属性とは動詞や形容詞のようなものであり、例えば「走る」という動詞属性のもとに発話者によって集められる実体(主体)の集合体である。構造モデルでは円盤(円板)で表される(図A17-3, -4)。この円盤は発話時に瞬時に再構成される。



図A17-3 属性は実体の集合体



図A17-4

この集合体が成立するためには、発話者によって、ある主体がある属性名のもとに存在することが承認されなければならない。そのためには発話者は「属性認定力」を持っていなければならない。これは属性形成のために主体

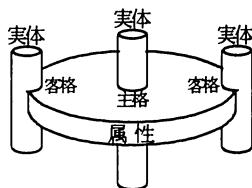
どうしを横に集合させる力である。「主体収集力」ということもできる。

文法は哲学ではなく情報科学であるので、ある実体の持つ属性には恒久的な属性ばかりでなく、一時的な属性もある。

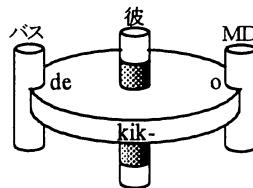
なお、その属性にとって基本的で不可欠な主体(抽象化される場合もある)が中心となって意義素を形成する。

③ 格(格結合) 実体-□ 格 属性-

構造形成の基本は実体と属性の結びつきである。実体と属性を結びつけるために働く力は「格」である。「主格」と「客格」の2種類がある(図A17-5, -6)。

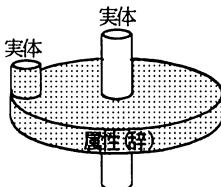


図A17-5 格結合

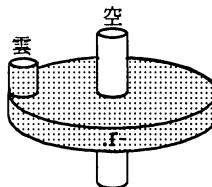
図A17-6 彼deはバスMDをkik-聞く

④ 融合 実体. 辞-

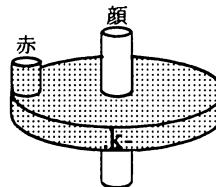
「kumo. r- (くも・る)」や「aka. k- (あか・い)」という形式のように、実体が辞(r- / ., k-等)と結び付いて一つの属性が形成されることがある。このときに働く力を「融合」と呼ぶ(図A17-7~9)。



図A17-7 融合



図A17-8 空がkumo. r-



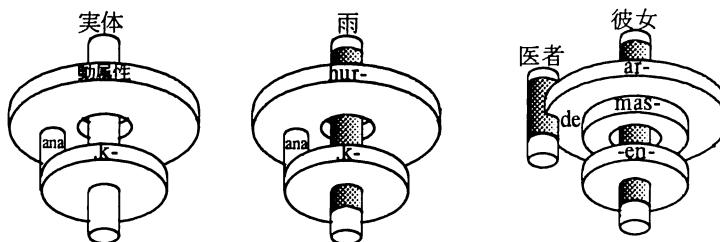
図A17-9 顔がaka. k-

⑤ 接合 動属性 - 否定属性 動属性 - 態属性

ある動詞構造を否定構造にする場合は、-(a)na.k- という否定形式を使用する。このとき、構造上では、-(a)na の部分に「接合」という力が働いて-(a)na が動属性に接着する。-(a)na が動属性に接着することで、実体(主体)と動属性の格結合(主格結合)が解除される(図A17-10, -11)。

なお、-(a)na.k- そのものには「融合」力が働いている。

助動属性 =mas- を伴う動属性否定に使用される-en- も =mas- に接合するが、構造の見やすさのために、=mas- との間に間隔を置いて図示している(図A17-12)。



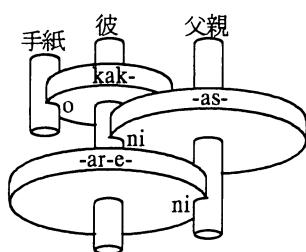
図A17-12

図A17-10 接合

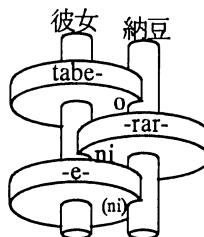
図A17-11 hur-ana.k-

医者-de-wa ar-i=mas-en-Ø

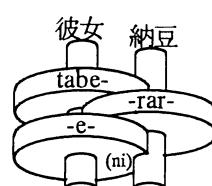
また、態属性 -(s)as-/-(r)ar/-e- も動属性に接合する。これも構造の見やすさのために、動属性、態属性との間に間隔を置いて図示している(図A17-13, -14)。図A17-15 は接合を示すために間隔を置かずに構成してある。



図A17-13 kak-as-ar-e-



図A17-14 tabe-rar-e-



間隔を置かない場合

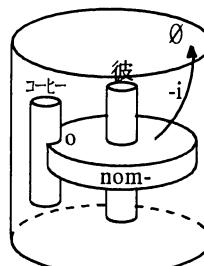
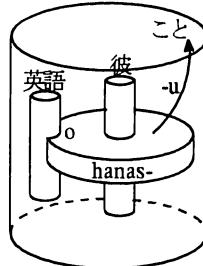
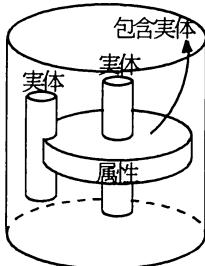
図A17-15

⑥ 包含 構造*包含実体 実体*カプセル実体

「包含」とは実体が構造や実体を取り込んで新たな実体を形成する力である。2種類のものを考えることができる。すでに形成された構造を内蔵するタイプの包含と、基本的に実体のみを内蔵するタイプの包含、の2種類である。前者に関わるのが「包含実体」であり、後者に関わるのが「カプセル実体」である。

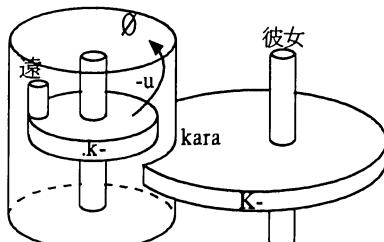
包含実体の場合

「彼が英語をhanas-u こと」という形式では、「こと」という包含実体が「彼が英語をhanas-」という構造を包含して名詞化している(図A17-16, -17)。



図A17-16 包含 図A17-17 彼が英語を話すこと 図A17-18 コーヒーを飲み

構造が包含されたのちに、その構造と包含実体の関係が描写される。このとき使用される描写法は、実体第1修飾法ないし第2修飾法である。上例の「hanas-u こと」は第1修飾法によるものである。第2修飾法の用いられた例としては「コーヒー-o nom-i θ」(に行く)(図A17-18)のようなものがある。第2修飾法の場合は包含実体は「ゼロ」になることが多い。



図A17-19
遠くから来る

「遠く」は「遠.k-」をゼロの包含実体に入れて(図A17-19), 形容属性の第2修飾法で包含実体と関係づけたものである。

カプセル実体の場合

「若さ・甘み・暑げ(暑そう)」等の下線部の形態素は、その前の(形容)実体に一定の意味を加えて新しい実体を形成する機能を持っている。この形態素にはカプセル(小容器)のモデルを使用する。上述の包含実体も一種のカプセルではあるが、包含実体は基本的に構造を包含するものとする。



図A17-20 若さ



図A17-21 甘み



図A17-22 暑げ/暑そう

カプセル実体の場合、包含される実体との間の関係づけを示す形態は、第4修飾法「+」であり、音声には現れない(waka+sa, ama+mi, atu+ge)。

カプセル実体「さ」は、包含する(形容)実体を「その実体の表す状態・気持・性質などそのもの及びその程度」を表す実体に変える(図A17-20)。

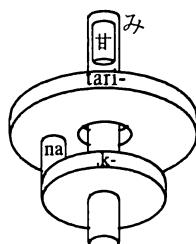
「み」は包含する(形容)実体を「その実体の示す内容が感じられる状態・性質」を表す実体に変える(図A17-21)。

「げ/そう」は包含する(形容)実体を「いかにもその実体の示す様態が実現している様子であること」を表す実体に変える(図A17-22)。

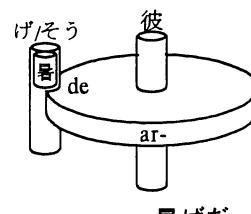
構造の中に組み込めば、図A17-23～-25 のようになる。



図A17-23 若さがまぶしい



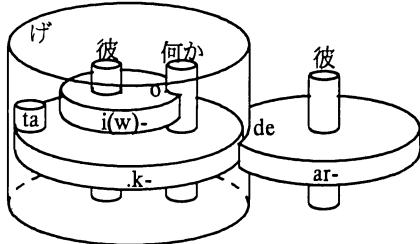
図A17-24 甘みが足りない



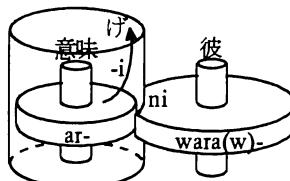
暑げだ

図A17-25 暑そうだ

ただし、「何か言いたげだ」(図A17-26), 「意味ありげに笑う」(図A17-27)などの「げ」は構造を包含している。前者の場合は「げ」を「そう」に換えることもできる。後者は「ar-i げ」のように、第2修飾法を使用している。これらの「げ」は構造を内蔵しているので、カプセル実体としてよりは包含実体として使用されることになる。



図A17-26 彼は何か言いたげだ



図A17-27 彼は意味ありげに笑う

構造形成には以上の①～⑥の力が関与するものと考えられる。ただし、まだ見過ごしている力もあるかもしれない。それで、便宜的にではあるが、一応この段階で以上の力を「構造形成6力」と呼んでおくことにする。

表A17-1 のようにまとめられる。

構造形成6力

表A17-1

| 力の種類 | | 形 式 | 具 体 例 |
|----------------|--------|-----------|-------------------|
| ① 実体認定力(属性収集力) | | | 犬 |
| ② 属性認定力(主体収集力) | | | hasir- |
| ③ | 格(格結合) | 実体 格 属性- | MD-o kik- |
| ④ | 融合 | 実体. 辞- | kumo. r-, aka. k- |
| ⑤ | 接合 | 動属性-否定属性 | hur-(a)na. k- |
| | | 動属性-態属性 | tabe-rar-e- |
| ⑥ | 包含 | 構造*包含実体 | hanas-u こと |
| | | 実体*カプセル実体 | waka+sa |

A17.2 基を形成する力……基形成7力／慣用力

構造の形成には「構造形成6力」が関わっていることがわかつた。次に、構造内にあってあたかも1つの要素であるかのような扱いを受けることになる「みかけの1要素」つまり、「基」を形成する力について考えてみたい。

「基」とは「詞(形態素)」がいくつか集まって一つのまとまりをなし、全体として一定の形式と意味を保つものである。例えば、⑪「タ=t-θ=a-θ」、⑫「勉強する」、⑬「立つ瀬」、⑭「よみがえり」、⑮「ほのお」、⑯「登山」、⑰「手足」などのタイプがある。

基を構成する際に働く力は、やはり構造上の形式であるから、基本的に上述の6つの力のいずれかである。のみならず、その力が働いた上でその構造に決まった読み方が適用されるので、「描写法」も関わりを持っている。

しかし、それにもまして「慣用力」が必要である。「慣用力」とは「タ」や「勉強する」等を慣用形式として認め、あたかも1要素であるかのように見なし、そのように扱う力である。

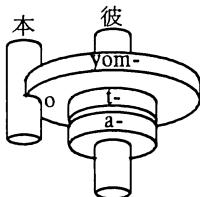
「基」は慣用力の要請のもとに構造形成6力と一定の描写法が組み合わされて形成される。

⑪ 連合 動属性-(i) = 属性 形容属性-u = 属性

「彼は本を読んだ」の構造は図A17-28 のようになっている。この構造において「読んだ」は3つの属性(動詞 yom-, 助動属性 t-, 助動属性 a-)の連合した形式になっている。「連合」とは複数の属性を組み合わせて一つのまとまりを形成させる力である。連合を形式的に表示する描写詞は、動属性・助動属性(・態属性)に対しては-(i)であり、形容属性(・否定属性)に対しては-u である。

「読んだ」は yom-i=t-(i)=a-(u) のようになっている。()内は発音されない、機能だけの形態素である。助動属性 =t- は「出来事開始後」を表し、助動属性 =a- は「存在」を表す。=t-(i)=a- (タ) となって基を形成し、過去完了、開始直後、以前完了等の時相を表す。

また、「飛び回ります」のような場合は *tob-* と *mawar-* という2つの動属性と、*mas-* という助動属性の連合形式である(図A17-29)。*tob-i=mawar-i=mas-* という形になっている。

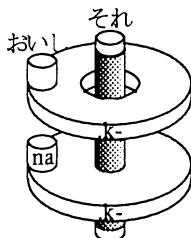


図A17-28 本を読んだ

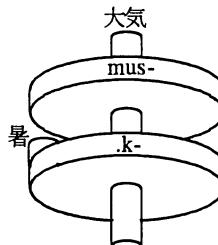


図A17-29 飛び回ります

「おいしくない」は形容属性「おいし.k-」に否定属性 *na.k-* が連合して形成されており、構造は図A17-30 のようになっている。連合を示す形態素は *oisii.k-u na.k-* のように *-u* である。



図A17-30 おいしくない



図A17-31 むし暑い

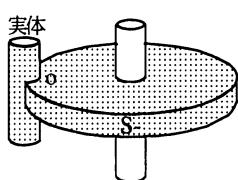
「蒸し暑い」(図A17-31)は動属性と形容属性の連合である。*mus-i=atu.k-* の形式になっている。

「おいしかった」は *oisii.k-(u)=ar-i=t-θ=a-* であり、下線部において形容属性のための連合の力が働いている(図示省略、「構造練習帳」7-5 図参照)。

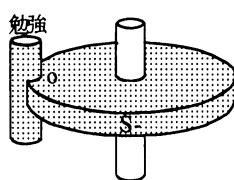
⑫ 併合

実体 = 属性

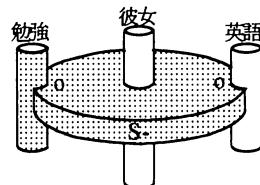
「勉強する」のような属性は、「勉強をする」という構造を持っている。その構造を保ちながらも、「英語を勉強する」のように、あたかも本来的な属性であるかのような(見かけの一属性としての)扱いになる場合がある。そのような場合、実体(勉強)と属性(する)の間に格(結合力)とは別に「併合」という一体化のための力が働くものとして扱う(図A17-32～-34)。



図A17-32 併合



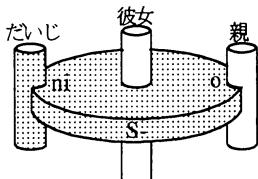
図A17-33 勉強=S-



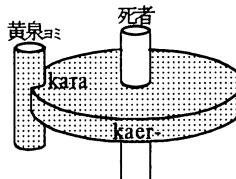
図A17-34 英語を勉強する

併合には格の描写という視点から3種類のものがある。「だいじにする」(図A17-35)のように「格を描写する併合」と、「勉強をする・勉強をする」のように「場合によって格を描写しない併合」と、「よみかえる(よみがえる)」(図A17-36)のように「格を描写しない併合」の3種類である。

「場合によって格を描写しない併合」というのは、描写すると「英語を勉強をする」のように「を格の重なり」が「表現されてしまう」ことを避ける場合に生じる。



図A17-35 daizi-ni=S-

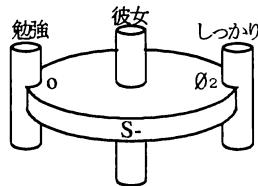
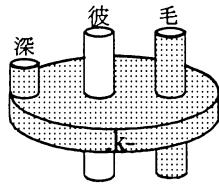
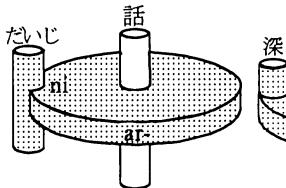


図A17-36 yomi=gaer-

「daizi-ni=a- だいじな(話)」(図A17-37)のように「格を描写する併合」ではあっても、ni の n のみのように、格を半分しか描写しない場合もある。

形容属性の場合は「毛深い ke=buka. k-」(図A17-38)のようなものがある。この場合は「格を描写しない併合」である。描写すれば、「彼の毛が深

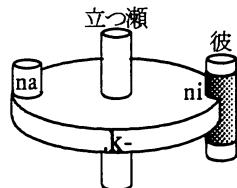
い」のように「が」格で出るはずである。



図A17-37 だいじな話 図A17-38 彼は毛深い 図A17-39 勉強をしっかりする

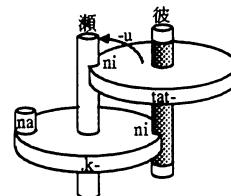
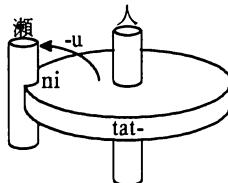
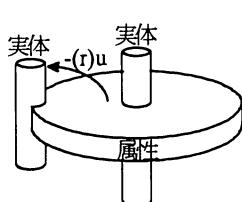
なお、「勉強をしっかりする」のような「勉強をする」が分離している場合は、併合力は働いていないものとする(図A17-39)。

⑬ 第1修飾 動属性-(r)u = 実体 形容属性-i = 実体



図A17-40 彼には立つ瀬がない

「彼には立つ瀬がない」というとき、「立つ瀬」という形式は、これで一つの実体として機能している。見かけの語である。この形式は元来「瀬-ni tat-」という構造から描写されている。



図A17-41 第1修飾法

図A17-42 tat-u=瀬

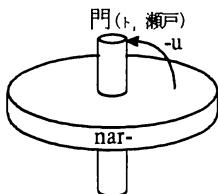
図A17-43 立つ瀬がない

この構造描写では、動属性に -(r)u という第1修飾法を適用している(図A17-41)。それで「tat-u=瀬」となるわけである(図A17-42)。したがって、「彼には立つ瀬がない」(図A17-40)という形式をより正確に示せば、図A17-

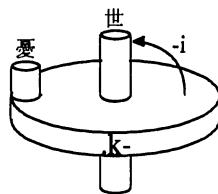
43 のようになる。しかし、通常は図A17-40の図示でよいだろう。

動属性によるもう一つの例として「nar-u=to」（鳴門：潮の干満時に大きな渦を巻いて鳴りとどろく狭い瀬戸）を挙げることができる（図A17-44）。

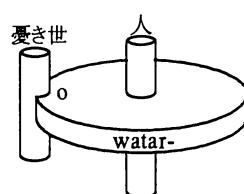
形容属性の場合には、この第1修飾法は -i という形式で現れる。例えば「憂き世(浮世) u.k-i yo」（『岩波古語辞典』参照）の場合、図A17-45のような構造を持っている。しかし、これも図A17-46の「憂き世(浮世)を渡る」のように、通常は一つの実体として扱ってよい。（「憂き世 u.k-i yo」は古典語の時代(平安時代)に生まれた形式なので k が発音されている。現代語の時代に生まれる場合には「yo. ~~k~~-i=ko よい子」のように k は発音されないはずである。しかし、そのような新しいものの例はほとんどない。）



図A17-44 nar-u=to



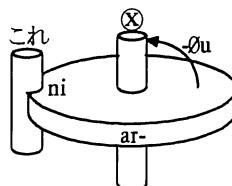
図A17-45 u.k-i yo



図A17-46 憂き世を渡る

◎ 実体不定の修飾基

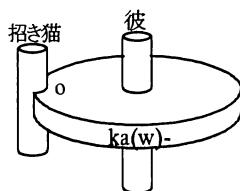
「こんな形」という形式の中の「こんな」は「kore-ni=ar-」という構造に、やはり第1修飾法（-u はゼロ化している）を適用した基である（『文法』37.7 参照）が、一定の実体と組み合わされるわけではない。実体はかなり自由である。このときの実体を \otimes で表示する。この基は図A17-47のように図示できる。このような基を「実体不定の修飾基」と呼ぶことにする。

図A17-47 こんな \otimes

⑯ 第2修飾

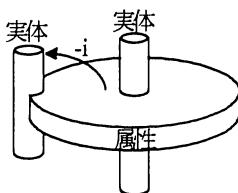
動属性-(i) = 実体

形容属性-u = 実体

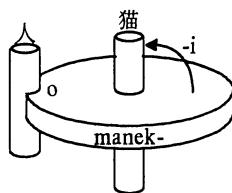


図A17-48 招き猫を買う

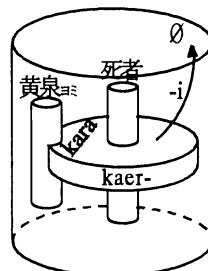
「招き猫」という形式は、これで一つの実体として機能する、見かけの語である。この形式は「猫- \emptyset 」人-o manek-」という構造から描写されている。描写の際に動属性に -(i) という第2修飾法を適用し、実体を修飾している。



図A17-49 第2修飾



図A17-50 manek-i=猫



図A17-51 yomi=gaer-i=∅

よみ=gaer-i=∅ (図A17-51) のように被修飾実体がゼロの場合は属性・構造が単に実体化(名詞化)されたものとして感じられる。

なお、形容属性の場合には、この第2修飾法は -u という形式で現れる(図A17-19)。

⑰ 第3修飾 ノ複合

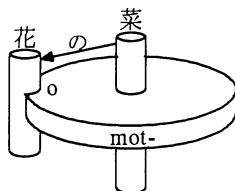
実体 [] 実体

図A17-52
菜の花が咲く

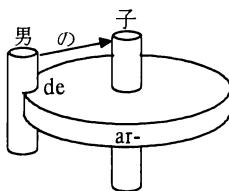
「菜の花」という形式はこれで一つの実体として機能するが、この形式は

例えば「菜-が 花-を mot-」(図A17-53)という構造上の実体どうしが「の」によって結び付けられた形で描写されたものと考えることができる。

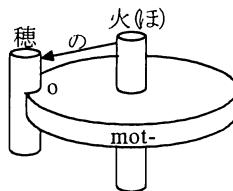
このように、「の」がある構造を形成している実体どうしをあたかも1語であるかのように(見かけの語として)結び付けるときに働く力が「ノ複合」である。



図A17-53 ノ複合（菜の花）



図A17-54 男の子

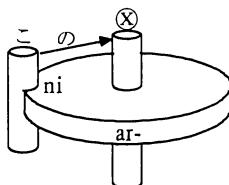


図A17-55 炎(←ほのは)

「男の子」は「子は男である」の構造(図A17-54)からノ複合で描写したものである。「ほのお」は語源的には「火(ほ)が穂を持つ」の構造(図A17-55)からノ複合で描写したものであると考えられる(『岩波古語辞典』参照)。

◎ ノ後実体不定の修飾基

「この花」の中の「この」はやはり基であるが、ノ後実体(『文法』36.2)に一定の実体を要求するわけではなく、ノ後実体となりうるものであれば何でもよい(⊗で表示)。この基は図A17-56のように図示できる。このような修飾基を「ノ後実体不定の修飾基」と呼ぶことにする(『文法』37.7 参照)。



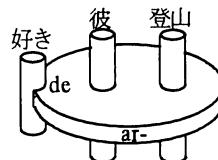
図A17-56 この⊗

⑯ 第4修飾 複合

実体+実体

「彼は登山が好きだ」(図A17-57)というとき、「登山」は一つの実体として扱われている。

しかし、形態素のレベルでみれば、やはり基である。

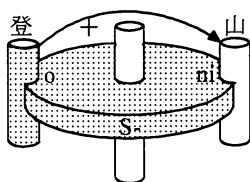


図A17-57
彼は登山が好きだ

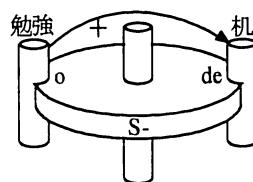
「登山」という形式は「山(やま)-に 登(のる)=S-」という構造(図A17-58)を持ち、この構造を構成する2実体が結び付けられて「登山」と描写されている。

このように、ある構造を形成している実体どうしが、あたかも1語であるかのように(見かけの語として)結び付くときに働く力が「複合」である。

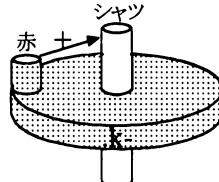
(「登」は、中国語では動詞として機能しているが、外来語として日本語に取り入れられた段階で実体(名詞)になっている。)



図A17-58 複合（登山）



図A17-59 勉強机

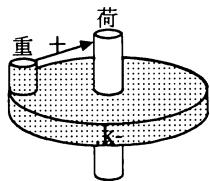


図A17-60 赤シャツ

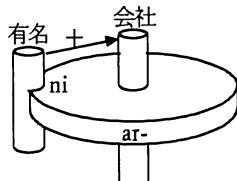
「勉強机」(図A17-59)はヲ格実体「勉強」とデ格実体「机」の複合したものである。「赤シャツ」(図A17-60)は形容実体「赤」と主格実体「シャツ」の複合したものであり、「重荷」(図A17-61)も同様のものである。「有名会社」は「有名な会社」(図A17-62)の構造から導かれる。これは漢語系実体での使用が多い形式である。

「白組」(図A17-63)はデ格実体「白」と、属性 ar- の主格主体「組」の複合したものである。「無精ひげ」(図A17-64)も同様である。

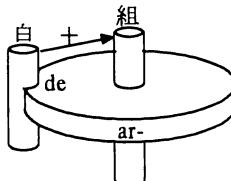
「細長い」も一つのまとまりであるが、構造は「細い」と「長い」の2つの形容実体どうしを複合したものである(図A17-65)。



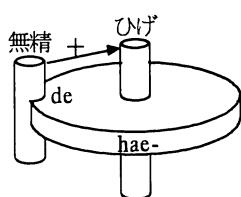
図A17-61 重荷(モニ)



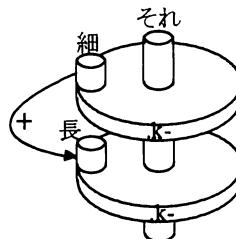
図A17-62 有名会社



図A17-63 白組



図A17-64 無精ひげ

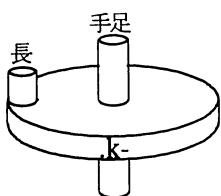


図A17-65 細長い

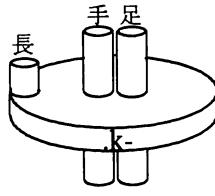
⑯ 同格並置

実体実体

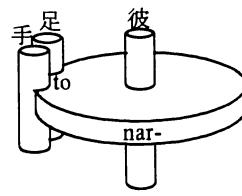
「手足が長い」という形式の中の「手足」は1実体として扱えば図A17-66 のようになるが、形態素としては「手」と「足」に分かれるから、より正確に表せば図A17-67 のようになる。この構造では「手」も「足」もまったく同じ主格にある。



図A17-66 手足が長い



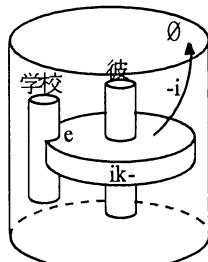
図A17-67 手足が長い



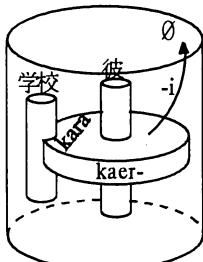
図A17-68 手足となる

「手足となる」(手足となって働く)の構造は図A17-68 のようであり、このときは「手」も「足」もトの格にある。

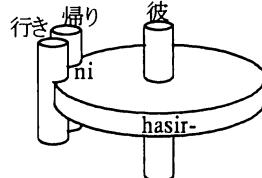
また、「行き帰りに走る」という形式では「行き」と「帰り」を二格に並置した構造となる。「行き」「帰り」は包含で第2修飾法を適用したものであり、図A17-69, -70 のようになる。組み合わせれば図A17-71 のようになる。



図A17-69 行き



図A17-70 帰り



図A17-71 行き帰りに走る

なお、「同格並置」は実詞が2つ並ぶという形式をとるので⑯の「複合」に似ているが、修飾関係はないということで、「複合」とは異なる。

以上、慣用力に基づいて基を形成する力を数え上げてみた。そのような力は⑪～⑯の7種類あるようである。まだ見過ごしている力もあるかもしれないが、一応「基形成7力」とし、表A17-2のようにまとめておく。

基形成7力

表A17-2

| 力の種類 | | 形 式 | 具 体 例 |
|------|----------|--------------|-----------------|
| ⑪ | 連合 | 動属性-(i)=属性 | nom-i=mas- |
| | | 形容属性-u=属性 | ama, k-u=na, k- |
| ⑫ | 併合 | 実体=属性 | 勉強=S- |
| ⑬ | 第1修飾 | 動属性-(r) u=実体 | tat-u=瀬 |
| | | 形容属性-i=実体 | u, k-i=世 |
| ⑭ | 第2修飾 | 動属性-i=実体 | manek-i=猫 |
| | | 形容属性-u=実体 | too, k-u=Ø |
| ⑮ | 第3修飾 ノ複合 | 実体ノ実体 | 菜の花 |
| ⑯ | 第4修飾 複合 | 実体+実体 | 登山 |
| ⑰ | 同格並置 | 実体実体 | 手足 |

A18章

多義文の構造

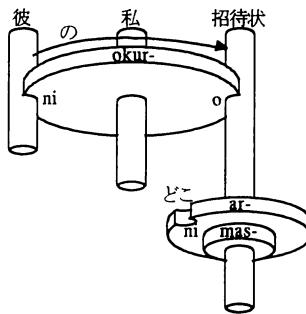
構造を描写して文の形にする場合に、構造は異なっているのに結果として別の構造を描写したのと同じ文が生まれてしまうことがある。このとき、文は同じなのに意味が異なる二義文・多義文が生じることになる。また、構造自体が多義を許しやすい性質を持つ場合もある。

この章ではいくつかの種類の多義文とその構造を示すことにする。

A18.1 「の」による多義文

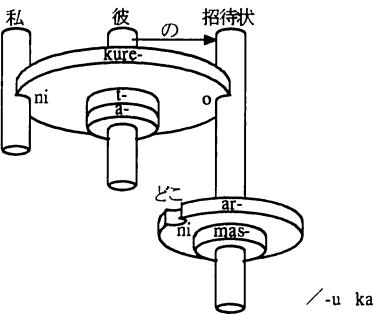
A18-1> 彼の招待状はどこにありますか。

「の」は構造上にある 2 つの実体どうしを結びつけて描写する機能を持ち、矢印で表示される(『文法』4.2 3), 第 XII 部)。ここではこの表層文をもたらす構造の例として、2 つの構造を示す。



図A18-1

彼の招待状はどこにありますか



図A18-2

図A18-1 では「私が招待状を彼に送る」ことになっており、図A18-2 では「彼が私に招待状をくれた」ことになっている。いずれの構造でも「彼」と

「招待状」の両実体は構造上にあり、論理関係にある。それで、いずれの構造からも「彼の招待状」が出てきて、表層では同一形式になってしまう。「の」はある2実体が構造上で論理関係にあることを簡潔に示す機能を持っているので、このような現象を生じるのである。

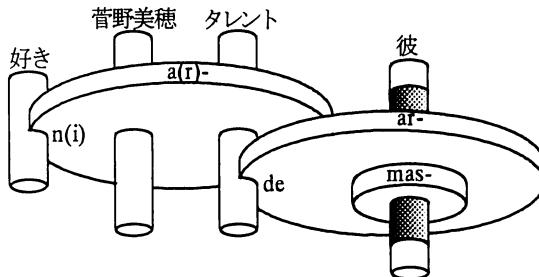
「の」は、このように2実体が論理関係にあることしか示さない(矢印な)ので、意味的な解釈を判断者(聞き手)にゆだねており、結果として判断者の抱くさまざまな構造に応じた多義文を発生させることになる。

「の」使用においては、異なる構造が同一の表層文を導き出すことが多い。

A18.2 断定基(de=ar-, ni=ar- 形容動詞)による多義文

A18-2> 彼_{0:1}は菅野美穂が好きなタレントです。

A18-3> 彼_{0:1}は菅野美穂の好きなタレントです。



図A18-3 彼は菅野美穂が好きなタレントです

「彼」のことについて述べようとしている。彼はタレントである。どのようなタレントか。「菅野美穂 が／の 好きなタレント」である。

この構造では「菅野美穂」「タレント」の2実体の一方が感覚主体になり、他方が帶感主体になる(『文法』第20章)。しかし、両実体がともに有情物であるために、いずれもが感覚主体、帶感主体のいずれでもあります。

それで、「菅野美穂」を感覚主体とすれば、「菅野美穂」が「タレント」を好いていることになり、「タレント」を感覚主体とすれば、「タレント」が「菅野美穂」を好いていることになる。

「菅野美穂」を「の」の実体つなぎで「(好きな)タレント」とつないで描写しても格関係はそのままなので、「が」格で描写する場合同様、二義的である。このように「好き・嫌い」が断定基で用いられた場合に多義文が生じる。この場合は構造自体が両義性を許している。

ところで、余談であるが、次の構造では何がズレているのだろうか。

祖母：ユミちゃん、パパの好きなところはどこ？

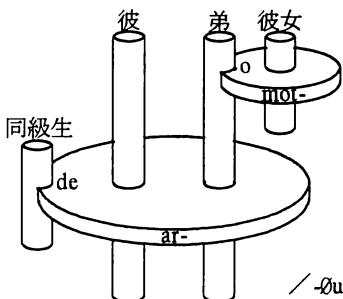
ユミ(幼い孫娘)：あのね、パチンコ屋。

A18.3 「と」による多義文

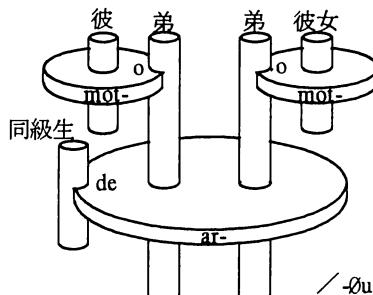
A18-4) 彼と彼女の弟は同級生だ。

「と」は「同格実体列挙描写詞」(『文法』5.2 及び19.3特徴7③)で、同じ格にある実体どうしを列挙する場合に使用される。(格詞の「と」とは別のものである。)「と」の場合は、どの実体とどの実体が同じ格にあると判断するかで意味が変化し、多義の可能性が発生する。

この例文の場合は、2つの構造が考えられる。



図A18-4 彼と彼女の弟は同級生だ



図A18-5

図A18-4 では「彼」と「彼女の弟」が同じ格、つまり、属性「同級生である」の主格にある。したがって、「彼」と「彼女の弟」が同級生である。「彼と、彼女の弟とは、同級生だ」と描写すれば一義的となる。

図A18-5 では「彼」と「彼女」が同じ格、つまり、それぞれが属性「弟を持つ」の主格にある。したがって、「彼の弟」と「彼女の弟」が同級生であ

る。「彼の弟と、彼女の弟とは、同級生だ」と描写すれば一義的となる。

この場合は異なる構造が同一の表層文を導き出している。(「の」については『文法』第36章)

A18.4 複主体による多義文

A18-5> 姉の結婚する娘が泣いている。

という文では次のような二義が生じている。

① 話者の姉に娘がいる。その娘は結婚することになって、泣いている。

② 姉のいる娘がいる。その娘は自分の姉が結婚するので、泣いている。

この二義は2つの別の構造の描写結果が A18-5> のようになるために生じている。そして例えば、この文のもととして異なる複主体構造の存在を考えられる。(この複主体構造については『文法』第19章で言及。)

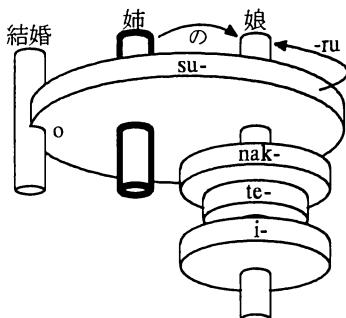
①の方では次の複主体構造が考えられ、

A18-6> 姉₀1は娘が結婚する。

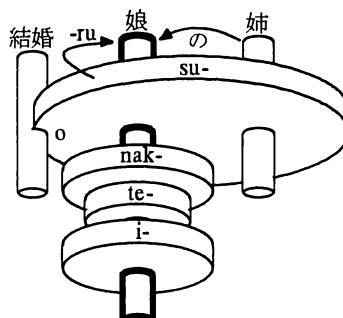
②の方では次の複主体構造が考えられる。

A18-7> 娘₀1は姉が結婚する。

前者からは図A18-6 の構造が、後者からは図A18-7 の構造が導ける。



図A18-6 姉の結婚する娘が泣いている



図A18-7

この場合は「姉」と「娘」の両主体がどちらも本主体(図では太線で示す)と属性主体のいずれでもありうるために多義文が生じている。

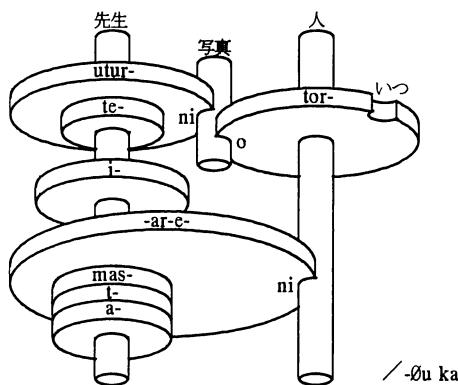
A18.5 受動基(-ar-e-)による多義文

A18-8> いつ写真をとられましたか。 tor-ar-e-

(ラ) レル文は「受身・可能・尊敬・自発」を表すといわれる。「受身・自発」は受動基Aを、「可能・尊敬」は受動基Bを構成する(『文法』12.5)。

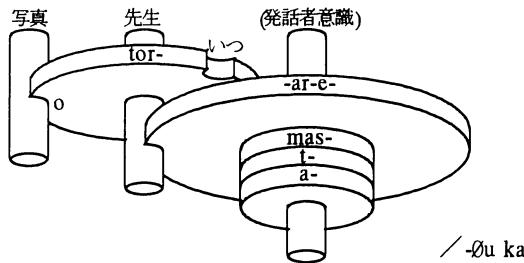
この例文では「可能・自発」はまず考えられない。「可能」は現代共通語では動詞が子音終わり(tor-)の場合、-ar-e-ではなく-e-によって構造が形成されるからであり(tor-e-)、また、「自発」は動詞が「思う・しのぶ・案じる」等、心の動きを表すものである場合に限られるからである(『文法』12.5)。それで、上の例文は「受身・尊敬」の多義文となる。

① 受身の場合の構造(受動基A)



図A18-8 先生はいつ写真を撮／取られましたか

② 尊敬の場合の構造(受動基B)



図A18-9 先生はいつ写真を撮られましたか

①の構造は受身の場合の一例である。「先生は(先生の写っている)写真をいつ撮り取られましたか」の構造である。「先生の写っている」の部分があるために「準直接受動態」になっているが、その部分を外して「間接受動態」にした方がすっきりするかもしれない(『文法』12.3)。

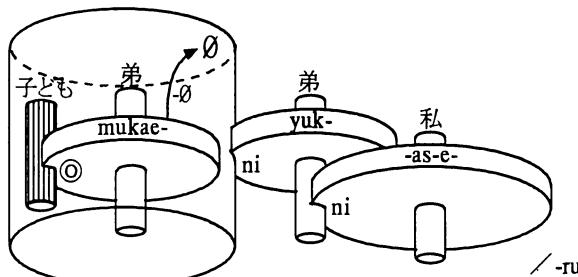
②の尊敬の場合には「発話者意識」が受身主体となる(『文法』12.5)。

この場合には異なる構造が同一の表層文を導き出している。

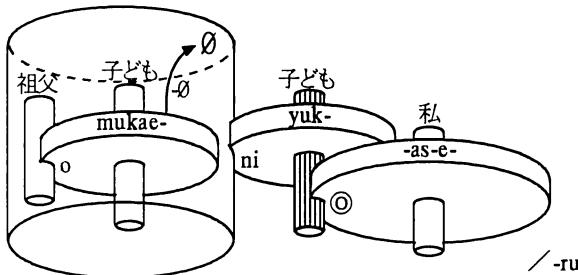
A18.6 使役基(-as-e-)による多義文

A18-9> 子どもを迎えて行かせる。 yuk-as-e-

この場合は、「子ども」の「を」が動属性「迎える」の「を格」なのか、使役態属性 -as-e- の「を格」なのかで意味が変わる。前者であれば、図A18-10 の構造となり、後者であれば、図A18-11 の構造となる。



図A18-10 (弟に)子どもを迎えて行かせる



図A18-11 子どもを(祖父の)迎えに行かせる

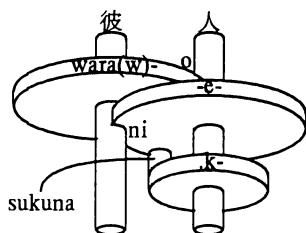
両構造から「子どもを迎えて行かせる」が描写でき、多義文となる。(使役基は『文法』12.5)

この場合は異なる構造が同一表層文を導き出している。

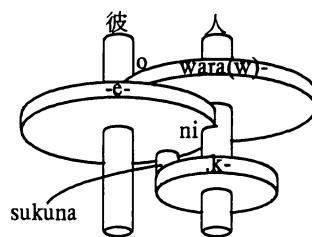
A18.7 許容態(-e-)による多義文(1)

A18-10> 彼が笑える人は少ない。 wara-e-

「彼が笑える人」は「彼を笑える人」「彼に笑える人」の二義を持つている。「彼を笑える人は少ない」であれば、彼は他の多くの人と同等の人であり、「彼に笑える人は少ない」であれば、彼は他の多くの人より劣った存在である。この多義は許容態 -e- (『文法』12.4)が生じさせている。



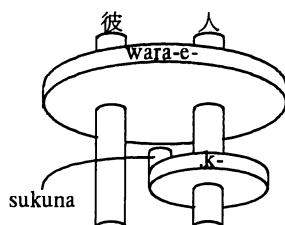
図A18-12 彼に笑える人は少ない



図A18-13 彼が笑える人は少ない

図A18-12 では「彼が人を笑う」のであり、これを「人」が許容している。その人は「彼に笑える人」になる。図A18-13 では「彼を人が笑う」のであり、これを「彼」が許容している。その人は「彼が(を)笑える人」になる。

許容態 -e- は「可能」を意味する場合には属性の一体化を生じ、warae-という一つの属性のようになり、図A18-14 のような構造になる。



図A18-14 彼が笑える人は少ない

このような構造になる過程で図A18-12 の構造からも「彼が笑える人は少ない」と描写できるようになる(『文法』12. 4. 1)。

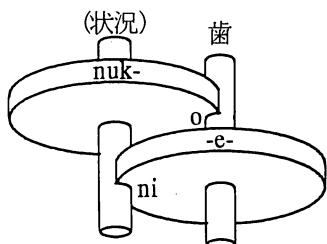
こうして多義文が生じる。この場合はもともと異なる構造が結果的に同一構造となり、同一表層文を導き出している。

A18.8 許容態(-e-)による多義文(?)……自動詞・可能動詞

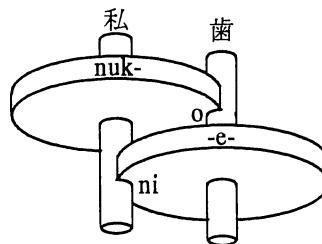
A18-11> 齒が抜けた。 nuk-e-

この文には歯の抜け方について二義がある。

- ①「何もしないのに自然に歯が落ちた」場合と、
 - ②「抜こうとして引っ張っていて、やっと抜くことができた」場合と、
- いずれの場合をも意味しうる。①は自然の出来事であり、②は可能となつた出来事である。一般的に「抜ける」は、①では自動詞として、②では可能動詞として考えられている。これを構造図示すれば、①は図A18-15のように、②は図A18-16のようになる。



図A18-15 歯が抜け(た)



図A18-16 (私に)歯が抜け(た)

①の図A18-15では、歯を抜く行為主体は何と特定できない。年齢かもしれないし、強い粘着物かもしれない。場合場合により異なるであろう。これを「(状況)」として表示しておく(英語なら it で表すようなものだろうか)。

②の図A18-16では、歯を抜く行為主体は、「私」のような歯を抜こうと試み、努力する主体である。

①②いずれの場合にも、許容態属性 -e- を持つ「歯」が行為主体と属性 nuk- の結び付きを許容している。nuk- の行為主体は「(状況)」か「私」か

で異なっても、(nuk)-e- の主体(許容主体)はともに「歯」である。

「歯が抜けた」という場合、抜く行為主体が何であるかによって自動詞と可能動詞との区別としてとらえられることが一般的であるが、両者とも構造形式は同じなのである(『文法』12.4)。

この場合は、構造自体が多義を許しているといえるだろう。

A18.9 形容詞による多義文

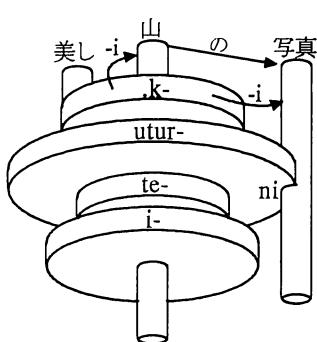
次の文からは2つの場合を考えることができる。

A18-12> 美しい山の写真がある。

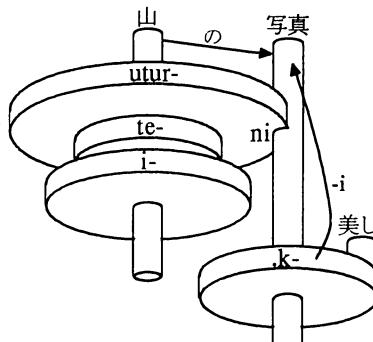
①「山」が「美しい」場合……「美しい山」の写真

②「(山の)写真」が「美しい」場合……美しい「(山の)写真」

構造で示せば、①が図A18-17となり、②が図A18-18となる(いずれの図も属性「ある」は省略してある)。①の構造からは基本的に「美しい山が写真に写っている」(写真に写っている山は美しい)と描写でき、②の構造からは「山が写っている写真は美しい」(美しい写真に山が写っている)と描写できる。「美しい」ものは、①では「山」であり、②では「写真」である。「美しい」という形容属性が「山」を主体とするか「写真」を主体とするかにより構造(意味)が異なっている。



図A18-17 ①[美しい山]の写真
③[山の美しい]写真



図A18-18 ②美しい[(山の)写真]
④山の[美しい写真]

A VII部 諸題

構造は異なっていても、いずれも自属性による主体の修飾(A16.5<11>)と、ノつなぎ(『文法』36.1)を適用した結果、同一の表層形式となっている。

また、次のような文でも二義が生じる。

A18-13> 山の美しい写真がある。

③「山」が「美しい」場合……「山の美しい」写真

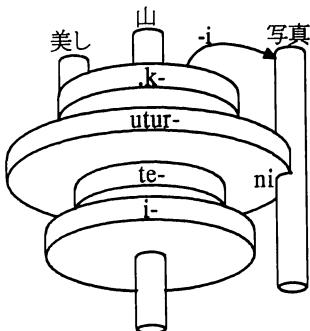
④「(山の)写真」が「美しい」場合……山の「美しい写真」

構造は、③は①と同じであり、④は②と同じである。修飾に関しては、③では①と異なり、「写真」が他属性「美しい」による修飾を受け(A16.5<20>)、④では②と同様、自属性による修飾を受けている。④が②(美しい山の写真)と異なるのは「山の」を「美しい」の前に描写していることであり、「山」が発話者の「事象認知の端緒」(この用語については現在考察中)となっていることである。②では「美しい」が事象認知の端緒となっている。

ちなみに、

A18-14> 山が美しい写真がある。

の構造は①(③)と同じであり、図A18-19 のようになっている。(やはり、属性「ある」は省略してある。) ③と異なるのはノつなぎがないことである。



図A18-19(=図A18-17) [山が美しい]写真

A19章

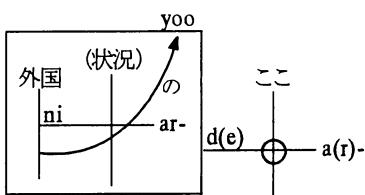
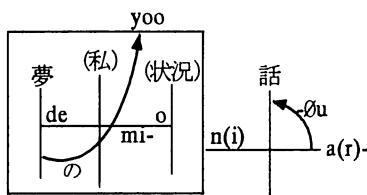
諸構造

A19.1 「ようだ・みたいだ」の構造

1) 「ようだ」

『広辞苑 第五版』によると、「ようだ」は「体言ヨウ(様)に指定の助動詞ダの付いたもの」で、「体言に格助詞〈の〉の付いた形、用言の連体形、連体詞に接続する」ということである。

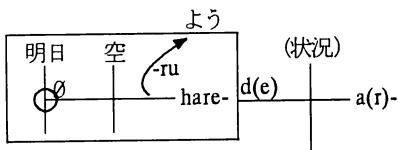
ということであるから、本文法の手法で扱えば、「ようだ」は図A19-1、図A19-2 のように、ある構造を内蔵する包含実体「よう yoo」が断定基の de/ni 格に置かれている構造であるということになる。

図A19-1 ここ \emptyset_1 は外国のようだ

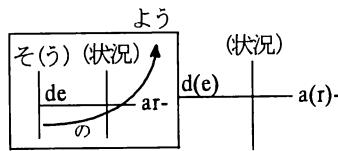
図A19-2 夢のような話

この両構造でのように、包含実体「よう」は、副構造(包含実体内構造)中のある実体(名詞)と「の」で結ばれて使われることが多い。

また、「よう」は図A19-3 のように、副構造の属性による修飾を受けることもあるし、図A19-4 のように、「その」のようなノ後実体不定の修飾基(いわゆる連体詞)による修飾を受けることもある。



図A19-3 明日の空は hare-ru ようだ



図A19-4 そのようだ

「よう」の関わる構造は以上のようなものとして考えられる。

意味については、やはり『広辞苑 第五版』に、こうある。

①比況を表す。…に似ている。…と同じである。…のごとくである。

「盆のような月」

②例示を表す。「君のような悪者にはなれない」

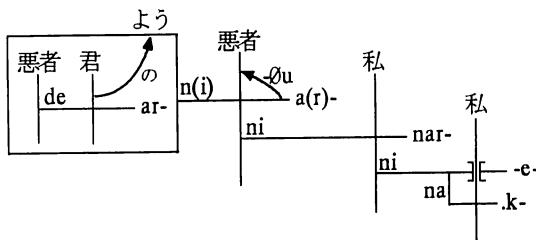
③推定、または不確実な断定を表す。

「山は荒れているようだ」「着いたようだ」

④婉曲な表現に用いる。「以上のような次第です」

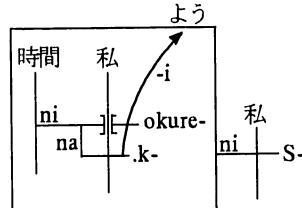
⑤目標・目的を示す。「時間に遅れないようにする」

②の例文を図示すれば、図A19-5 のようになる。



図A19-5 君のような悪者にはなれない

最後の⑤の例では「よう」は動属性「する S-」のni格にあり、断定基のde/ni格にある他のものと若干異なっている(図A19-6)。



図A19-6 遅れないようにする

以上の「よう」の意味は基本的に「様相・状況」と考えられる。

2) 「みたいだ」は「ようだ」から

やはり『広辞苑 第五版』によれば、「みたい」は「…を見たやう」の転。体言や活用語の連体形に付くとあり、それで みた - よう - だ【見た様だ】を引くと、初め「…を見たようだ」の形で用いたが、後には「を」を伴わずに体言に直接した。明治期にさらに転じて「みたいだ」になった。とある。つまり、「みたいだ」は「ようだ」から生まれたわけである。「みたい」の意味については、こうある。

①他のものごとに似ていることを示す。

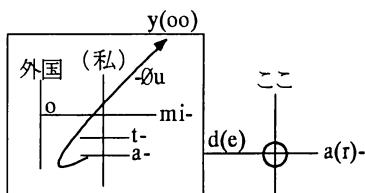
「機械みたいに正確な動作」「まるで夢みたい」

②例を示す。「京都みたいな古い町が好きだ」「お前みたいな奴は」

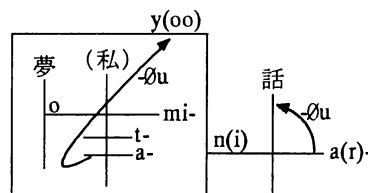
③不確かな判断を表す。また、婉曲な言いまわしにも用いる。

「疲れているみたいだ」「外国へ行くみたいな話だった」構造は、それで、「～を見たようだ」から出発して考えることになる。基本的には「ようだ」の構造であり、図A19-7～-9 のようになる。

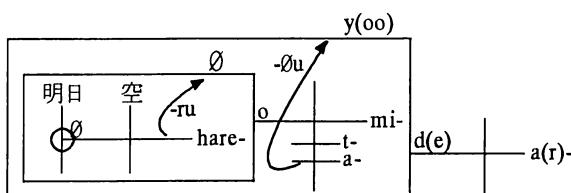
$mi-\emptyset=t-\emptyset=a-\emptyset u \quad yoo-$ みたよう(だ) → $mi-\emptyset=t-\emptyset=a-\emptyset u \quad y(oo)-$ みたい(だ)



図A19-7 ここ₁は外国みたいだ

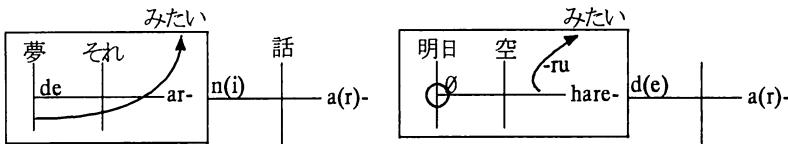


図A19-8 夢みたいな話



図A19-9 明日∅₂は hare-ruみたいだ

しかし、これではいちいち語源にまで立ちかえることになり、わずらわしい。現代語としては「みたい」を一つの包含実体としてしまっても問題はないようであるから、図A19-10, -11 のような簡略化した構造とすることにする。



図A19-10 夢みたいな話

図A19-11 明日∅₂は hare-ru みたいだ

図A19-10 の場合、「夢」と「みたい」を結びついている力は実体どうしを結びつける力である。(矢印で表された、この実体と実体を結びつける力<複合>についてはA17.2⑯参照。)

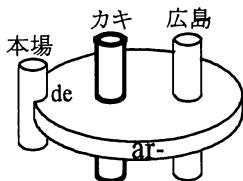
「みたいだ」の意味は基本的に「その様相を呈している」である。

A19.2 「カキは広島が本場だ」の構造と問題点

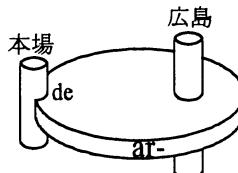
『文法』19.2において「ある主体が構造単位を属性とする構造」(複主体構造)を扱った。(なお、「構造単位」という用語は今後「単位構造」に統一する。)

ここでは「カキは広島が本場だ」という文がこの複主体構造を形成していることを確認し、あわせて問題点を指摘したい。

この文を図示すれば図A19-12のようになる。



図A19-12 カキは広島が本場だ



図A19-13 広島が本場だ

「カキは広島が本場だ」という文は本主体である「カキ」が「広島が本場 d=a-∅」という単位構造(図A19-13)を属性として持っている。

A19章 諸構造

| | | | | |
|------|--------|---|--------------|------------|
| 「カキ」 | ……本主体 | / | 「広島が本場d=a-θ」 | ……単位構造 |
| 「広島」 | ……属性主体 | / | 「本場d=a-θ」 | ……属性（断定属性） |

『文法』19.3において、この「単位構造を属性とする構造」に8つの特徴があることを述べた。「カキは広島が本場だ」を、以下のように、その特徴に照らし合わせて検討してみる¹。

① 属性主体として可能なのは、本主体と明瞭な関連をもつ実体である。

属性実体「広島」は本主体「カキ」と「産地と産物」という明瞭な関連をもつ。

② 文としてのノつなぎ描写は、本主体→属性主体のみが有効。

「カキの広島が本場だ」「カキの広島は本場だ」は一応許容できるが、『文法』19.2での例「彼は父親が公務員だ」（図A）から描写できる「彼の父親が／は公務員だ」ほどには自然でない。これがなぜであるかについて検討の余地がある。

（矢印の方向が逆である「?広島のカキが本場だ」「?広島のカキは本場だ」は、確かにノつなぎはできないようだ。）

③ 属性を実体修飾させる場合のノつなぎ描写は、双方向が可能。

「カキの本場である広島」

「広島の本場であるカキ」（ノよりガの方が自然だが、許容できる）

④ ③のノつなぎ描写が可能なのは、本主体が特定できる実体の場合である。
本主体は「カキ」なので、相対的なものではなく、特定できる。

⑤ 属性主体を主題化しない場合は、単位構造はまとめて描写する方がよい。

「カキは広島が本場だ」

「カキが広島が本場だ」（「何が広島が本場か」に対する回答）

「?広島がカキが本場だ」（分離すると確かに許容度は低い）

*1 当然のことなので、特に特徴としてとりあげてはいないが、本主体「カキ」は属性である単位構造（広島が本場である）の修飾を受ける（「広島が本場であるカキ」）。

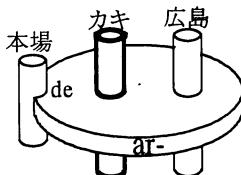
⑥ 属性主体を主題化する場合は、単位構造は分離してもよい(要注意)。

「広島はカキが本場だ」 (許容できる)

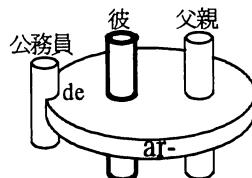
⑦⑧は、本主体、複主体のいずれかが複数個存在する場合なので、今の話題の場合には該当しない。

以上により、「カキは広島が本場だ」が、本主体が単位構造を属性として持つ複主体構造であることが確認できた。

問題点については②において1点指摘されたが、さらに次のような問題もある……「広島₀₁はカキの本場である。」は上の図A19-12から描写できないのではないかという問題である。



図A19-12(再掲)

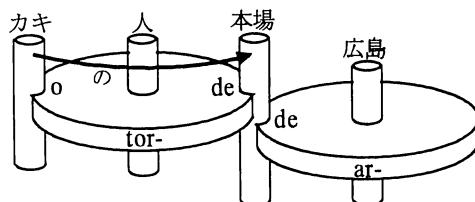


図A19-14 彼₀₁は父親が公務員だ

もし図A19-12から「カキの本場」という描写をすると、図A19-14からは「彼の公務員」を描写することになる。すると、「*父親₀₁は彼の公務員である。」を描写することになるが、これは非文である(②参照)。

上の②で指摘された問題点とも併せて考えると、この両構造には異なる要素を認めなければならないのかもしれない。今後の課題である。

ちなみに、「広島₀₁はカキの本場である。」はどのような構造を持つのであろうか。それは図A19-15のようなものとして考えられるであろう。

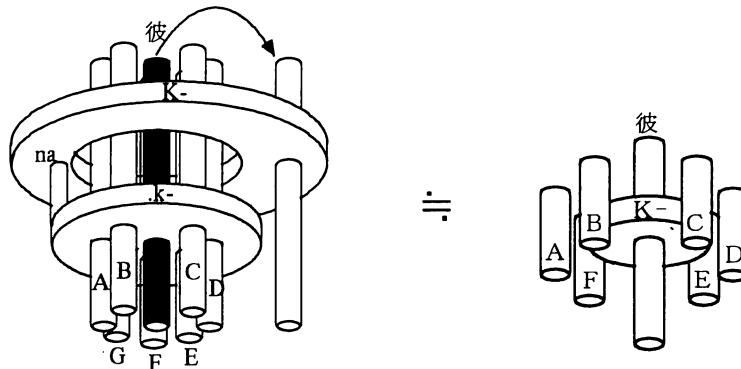


図A19-15 広島₀₁はカキの本場である

A19.3 「だけしか」の構造

「彼だけしか来ない」のように「だけ」と「しか」が重ねて使用される場合がある。この表現の表す事態は「彼しか来ない」と同一である。「だけしか」と「しか」は構造的にはどのような関係にあるのだろうか。

『文法』35.2において、「しか」は「自実体排除」の構造(図A19-16)を、「だけ」は「他実体排除」の構造(図A19-17)を、形成していることが確認された。



図A19-16 彼しか来ない
(A～Gは「来ない」。自実体「彼」だけ排除。)
図A19-17 彼だけが来る
(他実体排除)

図A19-16では「来ない」という属性を持っているのはA～Gの実体であって、「彼」はこの属性を持っていない。「彼」はこの主体群の中から抜け出る。実体を塗りつぶしてあるのは「抜け出る」ことを意味している。抜け出た後、単独で肯定主体となる。これが主格における「～しか～ない」の構造である。

ここにできあがる構造(図A19-16)は、意味の上では「彼だけが来る」の構造(図A19-17)と、ニュアンスは別として、ほぼ等価である。

「だけ」という描写は、図A19-17に見るとおり、他実体排除であるから、ある属性を持つ実体は唯一「彼」であることを意味している。

一方、「しか来ない」においては、図A19-16に見るとおり、自実体排除であるから、「来ない」という属性から「抜け出る」属性を持つ実体は唯一

「彼」であることを意味している。

「だけしか」は、上の「だけ」と「しか」の2つの下線部の意味の合成となるので、「抜け出る」属性を持つ実体は唯一「彼」である、ということを意味していることになる。ということは「だけしか」は「しか」と基本的に同一のものであることになる。

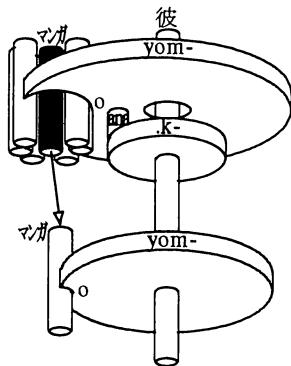
そこで、改めて図A19-16の構造を見てみると、確かに「抜け出る」属性に関して言えば、この構造には他実体排除の部分（「だけ」）が存在していることに気がつく。「彼だけ」が「来ない」という属性から「抜け出る」属性を持つのである。そして、「来ない」という属性から「抜け出る」属性を持つ実体は「しか」で表されるので、それで「『彼だけ』しか」となるのである。

これで、最初の疑問、「だけしか」がなぜ「しか」と同じ事態を表すのかという疑問に解答が与えられた。この二者が同じ事態を表すのは、構造的に当然のことだ、「しか」（自実体排除）の構造の中には「だけ」（他実体排除）が含まれていたのである。自実体排除の構造は別の見方からすれば他実体排除の構造でもあるわけである。

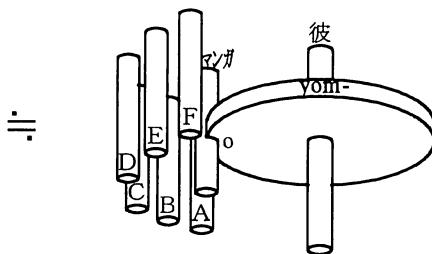
図A19-16の構造を描写する際に、「だけしか」と「しか」のいずれをも用いることができるわけで、敢えて他実体排除を前面に押し出そうとする場合に「だけしか」を用い、そうでない場合に「しか」を用いるのだ、と言うことができる。

さて、今検討したのは実体が主体である場合であるが、同じことは実体が客体である場合にも言える。

「彼はマンガだけしか読まない」という表現の場合、図A19-18の構造図に見るように、「マンガ」という実体が「読まない」（否定）の「を格」にあり、これが抜き出されて、「読む」（肯定）の「を格」に置かれる。このとき、「マンガ」は自実体排除を行うと同時に（小説・教科書・新聞等の）他実体排除（「だけ」）を行っているので、実体が客体である場合にも主体である場合と同じように扱えることが分かる。



図A19-18 マンガをしか読まない
(自実体排除)



図A19-19 マンガだけを読む
(他実体A～Fを排除)

実体の下位分類

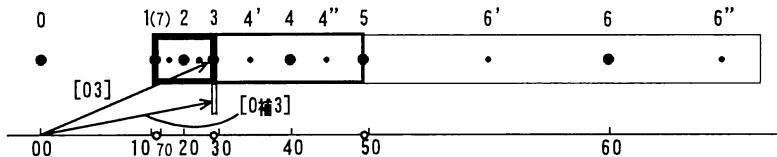
構造を作る3要素として「実体・属性・格」がある。属性や格がそれぞれに下位分類できるように、実体も5種類のものに下位分類できる。実体というのは、立体図では円柱(や包含円柱)で、簡略図では縦線(や縦長四角形)で示される、いわば名詞のようなものである。

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
|---|---|---|---|---|

- ①格無制限実体(どの格にでも置ける実体。④が可能なものもある。)
- ②格制限実体(いくつか置けない格がある実体。④でもあります。)
- ③格限定実体(to, ni, 02格/de, ni格/to, 02格/to格/02格 等のよう
な特定の格にしか置けない実体。)
- ④形容実体(形容辞“.k-”との融合という形で使用。)
- ⑤否定実体(形容辞“.k-”と融合。動属性・態属性とは接合する。)

※このことについては改めて詳述する必要がある。

前や後ろが見えないときは

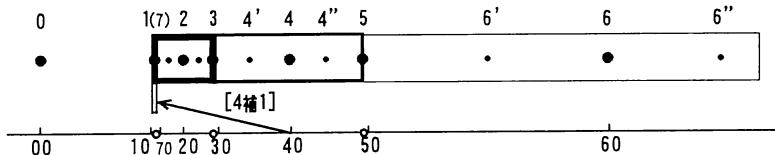


図A19-20 読み終える yom-i=oe-rū

※参考 終える(緒経る)…wōfe-rū → wō-ar-u wō- は「みかけの動詞(語幹)」

舟の後ろは前から見えないので、[03]をそのまま表現することはできない(*あした本を読んだ)。それで、絶対テンスでは未来完了を表すためには補助アスペクト(『文法』第15章)の「終える」等を使用しなければならない。図A19-20 のように、普通は幅を持たない「終える」という動属性を補つて「読み終える」のようにする。これなら「読む」の未来完了を「終える」の前からの描写によって表現できるようになる……「あした本を読み終える。」ここで補助アスペクトを補うことを言及線では [0補3] のように表すことにする。

過去開始も同様で、後ろから舟の前は見えないから [41] をそのまま表すことはできない(*きのう本を読む)。それで、図A19-21 のように、「始める」を補うことになる。



図A19-21 読み始めた yom-i=hazime-θ=t-θ=a(r)-θu

これなら「読む」の過去開始を「始める」の後ろからの描写で表現でき、「読み始めた」のようにタ形を使用して描写することができるようになる。(A10.1未来(2), A10.2過去(1), 『文法』15.1参照)